

JSPS第10回コロキウム「持続可能な自然環境を目指して」に参加して

甲南大学教授 谷口文章

JSPS主催によるコロキウム(2008年9月5日、於ストックホルム)に参加しての感想を述べよう。

オープニング・セッションでは、JSPSストックホルム研究連絡センター長の佐野 浩氏、日本特命全権大使の中島 明氏のご挨拶があり、自然および水環境の持続可能性の問題と、日本とスウェーデン両国の協力の重要性が指摘され、開催の趣旨が述べられた。

第一セッションでは、清水芳久氏(京都大学)の「持続可能性をめぐる諸課題」および Susanne Sweet 氏(ストックホルム経済学校)の「協力責任」についての総論的な講演があった。

第二セッションでは、田中宏明氏(京都大学)の「環境における薬物使用」、船水尚行氏(北海道大学)の「排水管理の概念」、Göran Finneveden 氏(王立工学研究所)の「環境に与えるインパクトの測定」、Ulrik Lohm 氏(リンケピン大学)の「自然と社会における水」について、各論のプレゼンテーションがあった。

午後からの第三セッションでは、筆者が「日本とアジアにおける持続可能な未来のための環境教育」についての講演を行なった。

総論と各論および両国の学术交流の統合として、パネル・ディスカッション「教育における持続可能性の統合」のテーマの下で、5人の講演者に加わって、新たにコーディネーター Anna Lundh 氏(スウェーデン国立高等研究所)、パネリスト Lin Lerpold 氏(SSE持続可能性研究グループ)、Cecilia Lundholm 氏(ストックホルム教育学部)の3人が参加して、計8人でプレゼンテーションとディスカッションを展開した。

また午後には同時並行で、ポスター展示とそのプレゼンテーションも行なわれた。

水環境を軸とした「自然環境の持続可能性」をテーマに、この国際会議では、日本の工学技術の公表とスウェーデンの環境教育と環境政策との意見交流、また「統合するものとしての環境教育」の重要性が改めて認識された。とくに筆者が強調したのは、環境教育の視点からの環境倫理の必要性と、自然科学のみならず、社会科学、人文科学の学際的研究とその理解であった。前者に関しては、持続可能性を「環境倫理によって基礎づけられた環境教育」によって方向づけを確立することであり、後者に関しては、学際的な共通の言語の創造について述べた。

会議の前日には、Hammarby Sjöstad センターで循環型都市の事例を知り、会議後にはストックホルムのダウンタウンを楽しく歩き回り、その文化と経済の一端に触れる有意義なストックホルム滞在であった。



パネル・ディスカッション



大学の前にて